



第10号
 (新春特別号)
 平成24年
 (2012年)
 1月・2月・3月
 発行・編集
 岡崎別院
 輪番 福田 大

修正会に憶う

新春のお慶びを申し上げます。昨年は宗門においては、宗祖親鸞聖人七五〇回御遠忌が厳修されましたが、時代社会は、東日本大震災の甚大な被害により、いまなお幾多のかたがたが苦しみの中で不安な生活を余儀なくされている現状であります。

ひと昔前まで、日本のお正月は、周りの店も閉まっていて、家族団らんでいろいろな会話に花を咲かせ、ことしの抱負などを語る特別な日だったに違いない。

もう、いくつ寝るとお正月
 お正月には凧上げて
 駒を回して遊びましょ
 はやく、こいこい
 お正月

この歌も、もういまは過去の風景であり、すでにわれわれにとってお正月は特別な日ではなくなりました。どこへいっても店が開いていて、平常と同じものを食べ、同じように生活ができる。特におせち料理の必要性もなく、家族団らんの時を過ごすことすらなくなったというのが、近年のお正月の風景ではないか。

一年に一度くらいは、家人が「昨年は自分にとってどのような年だったのか」「今年自分はなにがしたいのか」「東日本大震災について聞かれることはどのようなことか」等々を家庭の中で語り合い、お寺の中で語り合う。そのことを先達は修正会として大切に勤めてこられたのではなからうか。

ほとんど慣例化してしまった修正会であるからこそ、人と人が素直に語り合える場としての修正会が、いまわれわれには必要なものではなからうか。

仏教讃歌のつどい

十月二十二日

(土)午前十時より
 当院本堂において、真宗大谷派合唱連盟・真宗大谷派宗務所本願部・真宗大谷派宗務所青少年センターによる岡崎別院報恩講慶讃「仏教讃歌のつどい」が開催された。



通常は雅楽にて勤められる法要が、すべてエレクトーン演奏と合唱(口語訳の文章)によって厳修された。

雅楽も華やかな音色であるが、エレクトーンの演奏ですべてが和語による合唱であるところにも、一体感を感じさせるゆえんがあるように思われる。

リズムで暗唱していく形式は、先達から受け継いだお勤めの基調である。

法要終了後に出仕されたかたから「胸にしみて思わず涙が出てこになりました」という言葉があったが、実際、私自身も同感であった。

坊さんであろうが、御門徒であろうが、仏語を知っているものも、初めて聞くものも、老若男女がはつらつと声をそろえて仏教を讃歌する。そこには、ほんとうの意味での同朋唱和としての源流があるように思えてならない。

これからの新しい法要の模索として実施されたことであるが、このような新しい取り組みから先達の願いに帰って、全国各地でこの法要を通して人と人のつながりが実感できることを念じ上げるばかりである。

分陀利華

先日、腰痛で起つことも座ることも苦痛の日々を余儀なくされた。普段、なにも気にかけないで生活している事柄が、切実に身に響いた。そこにあることも意識になかった手すりの重要性にもはじめて気づかされたと同時に、いかに自分がなんの苦痛もなく動けることを当然にしているかということに、もうなやみかされた。

人間は支障が起きた身体その個性によつて、その個所の存在とはたらしきをはじめ知らされる。そんなことを思わされたことである。

不慮の事故で頸椎を損傷され、手足の自由を失われた星野富弘氏の詩集には、

いい日だ
 いい日だ
 つつじの花のむこうを
 老人が歩いていく
 赤ん坊をおぶっている足どりも
 軽やかだ
 右足左足右足左足
 あっ片足で立った
 おっ半ひねり
 すごいなあ人が歩くって
 私は前はあんな見事な技を
 こともなく毎日やっていたのか

生まれたことも、生きていくことも当たり前にし、死んでいくことを誤魔化しながら、自分の都合に合わないこととに腹を立て、他人との比較の中で愚痴をこぼし、他人を傷つけ、自分も傷つきながら、なにもかもわかつているつもりでいる。つねに人生の評論家であつたり傍観者ではあるが、一度も自らの人生を生きたことがない。そんな生きざまを宗祖は邪見傲慢の悪衆生とこの私に言い当てられたのではなからうか。

別院往来

〜結婚式〜
けっこんしき

十二月三日 拳式



新郎
小野文生
新婦
米川佳里

〜人形展〜
にんぎょうてん

十一月十九日から二十六日まで福江夢覚師による釈迦の十大弟子の人形展が岡崎別院の書院にて開催されました。



△宗祖を訪ねて▽

三日講聖跡参拝には二十人が参加され、親鸞聖人が得度をされた青蓮院と承元の法難との因縁の深い安楽寺と法然院を訪ねました。



青蓮院親鸞得度の間

青蓮院では、宗祖が出家され、こ

こから二十年間の比叡山での修行が始まったことをあらためて感じられました。

昼食の後、まず住蓮坊と安楽坊のゆかりの安楽寺を訪ね、心ならずも罪を受けて亡くなった二人が、法然上人の念仏の教えに深く帰依されたことが強く感じられました。

最後に、法然院を訪れて、法然上人の威徳が現れているお寺であると実感いたしました。

実際に自分の足で現地に赴き、体感することで、なにより身近に感じられ、学びやすくなることを願っています。

このような機会は一年に一度しかありませんが、これを機に今後の「宗祖を訪ねて」において互いに深く学習していく所存です。



一日長い距離を歩いて、ともにこの三日講聖跡参拝を無事に終えることができました。深く感謝申し上げます。今後ともよろしくお願い申し上げます。

岡崎別院の研修感想

沢田マルコス自然



私は日系ブラジル人です。北米での開教使試験に合格し、その一環として、岡崎別院に研修生として派遣されました。

約四十年間ブラジルで開教使をしてきた両親の苦労を見て、私は、この仕事は一生やらない、できるだけ他人に扱われる仕事をしなないと考えてきました。どんな仕事をしても私の思うとおりにいきませんでした。そしてなによりも嫌がっていたお寺の道に御縁をいただきました。

お朝事の流れから準備まで、一般寺院のあり方についていろいろと経験の場をいただき、輪番さんの厳しさと優しさが伝わってきました。列座の竹中さんは私よりずっと若いのですが、いろいろと教えてくださいました。

プライドが高く、何でも知っているという思い込みが強く、他人のことをあまり聞かずに頑固である私が、自分に素直になる研修でもありました。

自分の価値観だけで物事を見、私に利益になることしか考えられない自我の強い私。自己中心的なあり方が私の事実です。だから不安で弱い自分を受け取りたくないし、仏智をつねに疑っている私がいまですが、仏さんは私のようなものも見捨てずにつねに助けてくださっています。

ここでの研修は、私の力のなさを実感させ、ほんとうに迷惑をかけずに生きていけないことの確認ができた研修でした。別院のみなさま、貴重な経験の場をいただき、まことにありがとうございました。

△報恩講厳修のご報告と御礼▽

今年度もみなさまがたのご支援・ご協力により当院の報恩講を厳修することができましたことを、この紙面をお借りして御礼申し上げます。

顧みれば、山城第一組・山城第二組の住職・坊守・門徒会員のみなさまがたにより事前の清掃奉仕を、大谷専修学院のみなさまがたにより仏具のお磨きを、また当日は各方面のご協力により、信悟院殿御参修、池田勇諦御教導のもと真宗大谷派宗務所本廟部のみなさまがた、山城第一組・山城第二組の住職、若院の御出仕を賜り、みなさまがたの御尽力により厳修できたことでございます。今後、ますますのご高配を賜りますようお願い申し上げます。

宗史蹟親鸞聖人岡崎草庵跡
真宗大谷派(東本願寺)

岡崎別院

〒606-8335
京都市左京区岡崎天王町26番地

電話・FAX 075-771-2921

<http://okazakibetsuin.com>
info@okazakibetsuin.com